

審査の結果の要旨

氏名 東條 弘子

本論文は、中学校英語科の授業における文法指導ならびにコミュニケーション活動における教室談話の多相的な様相を明らかにすることを目的として、1名の英語教師の教室での教師と生徒の相互作用における発話の特徴を、5年間の観察を通じて明らかにした研究である。全体は5部11章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、外国語教育における教室談話研究を概括し、英語初学者を対象として英語授業過程を分析した研究の必要性を指摘している。第2章ではヴィゴツキー心理学ならびに近年の外国語研究における社会文化的理論にもとづき、生徒の発話に見られる社会的生活の起源を捉える、学習内容の理解に際する媒介の機能を捉える、発生的・発達の分析に基づき新たな機能の生起を捉えるという本論文の分析枠組を導出し、第3章では、その具体的な研究方法として、実践者との協働的な実践研究のあり方を論じている。

第Ⅱ部では、生徒の社会的生活に基づく発話に着目し、第4章では、英語の不得手な生徒の発話内容を検討し、生徒の発話には各自の学校・家庭生活の一端を反映しており教師は定型表現に則った「声」との交流を促すことで、生徒を正答へ誘う対話が生起することを示している。第5章では、内容重視のコミュニケーション活動としての口頭導入における生徒の母語による「つぶやき」を分析し、教師発話は英語であっても生徒のつぶやきが母語でなされることで理解が深化する可能性を示している。

第Ⅲ部では、学習内容の理解に関わる発話に着目し、第6章では、一人の生徒の「わからない」という「つぶやき」の内容を分析し、文法用語や文法概念の理解のつまづきに関わるつぶやきが理解中程度の他生徒の思考を代弁し理解を促す事例を示している。また第7章では、英語が苦手な生徒の教室談話の変化過程を分析し、教師のみならず生徒の協働的な足場かけが文法理解を促す点を示唆している。第8章では、コミュニケーション活動において仲間同士での対話における母語が内容理解を支える点を明らかにしている。

続く第Ⅳ部では、生徒と教師の長期的変容に注目し、第9章では一人の生徒の1年9ヵ月間の教室談話の中での「つぶやき」の特徴と変容過程を検討し、主体的な参加とともにつぶやき内容の質に変化が見られることを示している。また第10章では、教師側の談話の変化を捉え、生徒の応答が予測できない真正な質問を発し、母語の使用頻度を増やしていく変容過程を明らかにしている。

第Ⅴ部第11章では、一連の研究を踏まえ、中学校英語科における教室談話の特徴をまとめ、本研究の意義と今後の課題を総括している。

本論文は、英語教育において社会文化的アプローチから教室談話過程を分析した点、筆者自らの英語教師としての実践者の視点を生かし、協力教師の長期的変容過程も含め取り上げた実践研究論文である。この点でオリジナリティが高く、今後の英語授業における談話研究の課題や新たな視座を提示した論文であると高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。